

オレンジの巣

力強くからだの芯をふるわせもう幾日経っただろう
／虚しく終わっていく月日の数だけ成長していく細
胞／そのどれもが意味をもたない／30日経って右
のあの子は震えてる／小刻みに痙攣しながらこちら
を見ている／彼女は誰にも認めてもらえない／ただ
機械みたいに生産するだけ／使って捨てる産まれて
また吐き出して捨てる／目は腐り／内蔵は機能しな
い／あと30年彼女はそれだけをやる／そして干か
らびる／左のあの子はやたら精気に満ち溢れている
／彼女はまだ気づいていない／飲みこまれる前に逃
げ去ろうとする／或いはまだ自身の存在認識がきち
んとなされていない／どちらにせよそれが良いこと
か悪いことかなんて誰も知らうとしない／あの子が
あのオレンジの巣で眠ってからもう50日も経った
／辺りは土煙に巻かれて荒れ果て／すがりつくよう
に捲したてるように風がからだを揺らす

たんばく質よ／すがりつく粘膜へ張りつけ／たまご
／牛乳／鶏肉／プレーンヨーグルト／ビタミン剤／
吸収／吸収／代謝／形成してまた吐き出せ／夜は長
い／生暖かい雲が上空を彷徨い上昇したり下降した
りして彼女の脳みそを圧迫した／ときどき逆さまに
なって全身を反らしてみようまくいかない／い
っしか生暖かい風は熱風へと変わり／周囲の木々は
ごうごうと音をたてて崩れていった／あの子の姿は
もう見えない／静寂の中で別の誰かに出会ったのか

もしれない／そして一緒にどこかへ行ってしまったのだろう

ようやく目覚めた彼女は見えない目をそっと開く／からだの力の入れ方がよくわからない／最初に右腕を伸ばしてみると変な方向へ腕が曲がった／彼女は怖くなって元に戻すと今度は左手の小指をピンと立てた／うまい具合にいった気がした／大きく膨らんだお腹をさすりながら小さくクシャミをした／口をできるだけ左に広げて熱風を一息で全部吸い込んでしまふと／だんだん彼女のからだに血の気が戻ってくる／どくどくとした液体が彼女の中心に集まると屈むようにして彼女は巢の真ん中に立ち／からだを大きくしならせた／そのまま前後に揺ると突然何か弾けたようなバネが切れて振動したかのような音がした／彼女のからだは一気に縮み巢の奥へ奥へと入っていき見えなくなった／彼女が吐き出した丸い塊はふらふらと壁にぶつかりながら風船のように頼りなく落ちていった

今はもう彼女は安心して眠ることができ／縮まったからだは毛布に包まれ守られている／海が静かに一定のリズムで波打っている／反対側のあの子は薄目を開けてその様子を見ていた／遠くの方でミルクの匂いがする／眠りと眠りの柔らかい橋の上で彼女はひとときの幻想を楽しむ／落ちていく風船や血液や毛布をゆっくりと感じる／季節が巡りまた春がやってきたのだと彼女は思った

「いっそのことわたしたち死んじゃえばいいよ」

「くだらない、そんなこと」

「眠ってるときは死を身近に感じるわ」

「ねえ、宇宙ってどれぐらい広いか知ってる？」

「そんな話やめて。こわくて頭が狂いそうなの」

「わたしたちはほどほどに自由よ、たぶん」

「だったら一生眠っていたい」

「もういい、どうせからだはどんどん縮んでいって

なくなるんだから、どっちだって同じこと」

「じゃあどうしてわたしたち、機械のように正確に

作られなかったの」

「それは、季節を感じることを許されたんじゃない

の」

「何も知らないことが幸せなんて思わないわ。でも

知りたいと思わないこともあるのよ」

「見たでしょ？あの惨めな最後。消えていく瞬間。

耐えられないわ」

「ねえ、宇宙って、昨日見たあれのことかしら？」

まだ彼女が幼かったとき／夕暮れはまっすぐで太陽は刺激的だった／雲はそのかたちを指でなぞりたくなるくらいに雄大で／彼女は思う存分肌をこんがりと焼いた

風船はみるみるうちにしぼみ／形をとどめなかった／誰かが脱ぎ捨てて放置した服みたいに／それが何なのか判別できないくらいに平坦だった／やがてすべての塊も液体も少しずつ混ざり合って長い時間をかけてそれはひとつになった／ゆるやかにあたたくく流れていくそれを／彼女たちは一生見ることはない／また季節が巡るのを感じるごとに／時間の経過

を感じるだけだ／時間は／彼女たちを少しだけほつ
とさせた／眠っている間は世界は止まっているよう
に思えて／彼女たちは果てしなく遠いどこかに来た
夢をみる／縮んでいくからだを丁寧に撫でていく／
小指をピンと立ててみる／触れてみると微かに左に
湾曲していた

やがて彼女のからだははち切れんばかりに膨らんだ
／血管が浮きでた肌は電気を放ちながら赤黒く染ま
って今にも破裂しそうだ／頭を振りながら熱くなっ
たからだを苦しそうに何度も振動させる／やがて小
さく静かにひとつ呼吸するとまた大きく膨らんで亀
裂が生じ／その間から何か顔を出した／それはま
だ人間のかたちをしていない胎児だった／胎盤に寄
り添いまだ伸びていない腕を伸ばそうとする／羊水
に沈み静かなゆるやかな静寂に耳を澄ます／それは
やがて意志を持つようとしている／本能の種がよき
によきと心臓の動きとともにすみずみまで広がって
いく／荒れ果てた土地は潤いを取り戻し／栄養のす
べてを潤滑に運搬していく
無風で無音で美しい世界

カーテンの向こう側から数人の声と金属の音が交差
している／そのうちの一人が名前を読みあげ／顔の
見えないだけか近づいてくる気配がする／恐怖で
足がすくみ／固定された足の内側がカチリと奇妙な
音をたてる／空間の操作／ガラガラ画面を見つめ
る／看護婦のスリッパの音／事務的に作業を終える
と番号が読みあげられ／また元の場所へと戻る／ク

ラシックが平然と流れる室内で／不機嫌なマスクが
一列に並んでいる／まぶたの奥が染みていく／感覚
が麻痺してしまったのは／人間だからだろう

それはただの黒いまあるい物体だった／あれが？／
手の中に収まりそうなそれが／膨張していく様子を
想像した／そして産まれる／わたしの中で？／そし
てそれは／一体何が操作されて／どこに行く？／気
怠いからだを引きずりながらぼんやりとそのことば
かりを考え続けた／点と点がうまく結びつかない／
歩道橋から見ると街も複雑だ／あちらこちらに吸いこ
まれていく人間が細胞のように見える／赤と黄色と
緑の電飾が汚らしく混ざりあう／ひとつ／ひとつ／
順番に快樂を飲みこんでいく／ブラックホールのよ
うに／抵抗することなくつぎつぎと／季節が巡るよ
うに／手のひらから宇宙が／こんこんと湧きでてき
た／浸食／風景の中にそっと浮かびあがると／声が
きこえた／彼女たちの声だった／街の中から無数に
伸びる白い手／その手はうごめきながら雑踏の中を
ゆっくりと這っていく／生命が／たくさんの生命が
／圧倒的な早さで／目に見えない速度で／わたしを
飲みこんでいく／それは巨大化し／大きな渦となっ
て空へと昇っていく／息を大きく吸い／自分の内部
を凝視する／内部の景色はまた広がり／わたしを宇
宙の入り口へと誘った／入り口から入り口へ／目眩
のするような変化と再生と消滅を何度もくりかえし
／わたしの中から中へと／そしてまたひとつ／小さ
な息吹を宇宙へと送りこむ

風船を持って泣きながら近づいてきた少女がこちらを見て少し笑った。ぎこちなく笑い返すと、同時に手から風船の紐がほどけ、ゆらゆらと暗い空に吸いこまれていく。少女の泣き声が切り裂くように辺りに広がる。無限の黒の中に浮かぶ月の上に風船が重なり、戯れながら、やがて消えていった。物質は物質を越え、質量を保ちながら変容し、わたしたちの世界をいつまでも静かに操作していく。手のひらをそっとひらき、もう一度強く握り、わたしは足早に歩きだした。

